

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第77号

2017年3月

日本薬史学会2017年度の主要行事のご案内

編集委員会委員長 西川 隆

2017年2月7日の常任理事会で、本学会の2017年度の総会関連および柴田フォーラムの日程が決まりましたのでお知らせします。すでに決定しております2017年会（埼玉・日本薬科大学）を加え主要行事の日程などもご案内します。年会の詳細は本学会のウェブサイトなどで続報します。

●総会関連

開催日：2017年4月15日（土） 12：00より受付開始

会場：東京大学薬学系総合研究棟

- 1) 12：30～13：30 理事・評議員会（10階大会議室）
- 2) 14：00～15：20 総会（2階講堂）
- 3) 15：30～17：40 公開講演会（同上）
15：30～16：30 田辺三菱製薬株式会社取締役会長 土屋裕弘氏
「田辺三菱製薬の歴史に見る、製薬企業が歩んできた道と今後の方向性」
16：40～17：40 元東京国立博物館特別研究員 岩間真知子氏
「茶はくすり 中日資料から見える茶の姿」
- 4) 18：00～ 懇親会（東京大学・山上会館） 会費4,000円

●第10回柴田フォーラム（詳細は次頁を参照）

開催日：2017年8月5日（土） 13：25より受付開始

会場：東京大学薬学系研究科 南講義室

平安堂薬局 清水真知氏「祖父・清水藤太郎と平安堂薬局」

明治薬科大学理事長 奥山 徹氏「柴田承二先生との思いを語る」

●日本薬史学会2017年会（年会長：日本薬科大学教授 船山信次）

開催日：2017年10月28日（土）

会場：日本薬科大学（埼玉県北足立郡伊奈町小室10281）

アクセス：JR大宮駅より「さいたま新都市交通」（ニューシャトル）で志久駅（約18分）下車。会場まで徒歩約5分。駅のホームから大学の一部が見える。

日本薬史学会第10回柴田フォーラム開催ご案内

下記により柴田フォーラムを開催いたします。今回は10回目の記念として、日本薬史学会に大きな足跡を残された清水藤太郎先生と柴田承二先生について、ゆかりの先生方に語っていただこうと思います。会員以外の方もお誘いの上、奮ってご参加下さい。

日 時：2017年8月5日（土）

17：00～18：30

会 場：東京大学大学院薬学系研究科南講義室
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

ビアパーティ 薬学図書館1階ロビー

参加会費：無料

参加申込・連絡先

ビアパーティ：3,000円（当日受付にてお支払いください）

折原 裕（東京大学大学院薬学系研究科）

プログラム 受付開始（13：25 から）

TEL 03-5841-4758/FAX 03-5841-4758

13：55～14：00

E-Mail：oriharay@mol.f.u-tokyo.ac.jp

開会挨拶：船山信次（日本薬史学会柴田フォーラム委員長）

申込締切

14：00～15：20

会場設営などの関係上、2017年7月28日（金）までにお申し込みいただければありがたく存じます。

(1) 祖父・清水藤太郎と平安堂薬局

会場案内

清水真知先生（株式会社平安堂（平安堂薬局）顧問）

フォーラム当日は土曜日のため建物内に自由に入ることができません。薬学部北側正面玄関よりお入りいただき、案内板に従い南講義室までお進み下さい。南講義室は下図矢印先端の建物1階です。

15：20～15：30

休憩

15：30～16：50

(2) 柴田承二先生との思いを語る

奥山徹先生（学校法人明治薬科大学理事長）



本郷キャンパス 薬学部

日本薬史学会・中部支部講演会例会報告

中部支部長 河村典久

下記の通り日本薬史学会・中部支部講演会例会を開催いたしました。講演会では盛んな意見交換が行われた。また、講演会終了後の例会では、今回より会場を金城学院栄サテライトにて開催すること、中部支部の会員増、今後の講演会・例会の開催について、日本薬史学会2017年会開催の案内、今後の支部会員への連絡方法をできればメールにて行いたいなどについての意見を伺ったが、異論は出なかった。

記

日時：2017年2月18日(土)午後2時～4時30分

参加者：17名

場所：金城学院大学栄サテライト

〒460-0003

名古屋市中区錦三丁目15番15号

CTV錦ビル4階

(セントラルパーク地下街10A出口前)

講演会

演題1：「パウアー写本の箱」

○ 夏目葉子 (日本薬史学会)

【要旨】

演者は、2009年8月から、古代インドの医学的処方集とされる、『パウアー写本』について研究を行ってきた。その第2部『ナーヴァニータカ』をはじめに、『薬史学雑誌』、日本薬史学会、国際薬史学会での発表活動を続けている。

2014年4月には、名城大学国際的調査・研究助成制度の一環として、英国オックスフォード大学に所属するボドリアン図書館ラドクリフサイエンス分館にて『パウアー写本』に関する文献調査の機会を得た。そこで本発表では、調査報告を行いつつ、画像とスケッチをもとに、「パウアー写本の箱」について考察を行う。

『パウアー写本』がどのように保管され、扱われて

いるのかは、あまり知られていない。演者は、文献調査において、運ばれてきた写本の入った木箱にも興味を見出した。それは、組み木造りで、釘を用いず木ねじを使用した、頑丈な手作りのものであった。木箱の2辺に取っ手があり、蓋を開けた内部の仕切りには、写本の取り出しを容易にするための凹みが作られていた。木箱に用いられた木材の材質を、明らかにすることはできなかった。しかし、A. F. Rudolf Hoernle (1841-1918)博士により『パウアー写本』の英訳校訂註の出版された1912前後に製作されたものと推定される。

また、文献調査時、ボドリアン図書館のご厚意により、Hoernle博士の研究ノートと書簡を閲覧することができた。今までの研究論文では未発表の内容を、『パウアー写本』の理解を促すものとして紹介する。

演題2：人文社会薬学 1.宗教と薬学史

○ 奥田 潤 (名城大学名誉教授)

【要旨】

薬剤師が患者に病棟で投薬するようになり、平成18(2006)年より薬学教育は4年制から6年制となった。平成24(2012)年より新薬剤師国家試験が始まり、新制度の薬剤師が生まれた。そのために従来の「基礎薬学」のみでなく、「人文社会薬学」が必要となった。「人文社会薬学」とは、演者の造語で、「人文科学、社会科学の中で薬学に関係する部分を統合したもの」をいう。したがって、薬事法規、薬剤師倫理などは、「人文社会薬学」へ含め、薬学は「基礎薬学」と「人文社会薬学」の2本立てとすることを提案した。

人文科学に含まれる宗教については、患者はそれぞれ独自の宗教観をもち、薬剤師も基礎的な宗教学が必要となってきた。

「平成18年版の宗教年鑑」によると、日本人は神

道系信者が約1億人、仏教系信者が約9000万人おり、複数の宗教団体に所属している人が多く、神仏習合の風習の名残といえる。キリスト教信者は260万人、その他は992万人いるといわれている。一方、平成17年2月13日の中日新聞サンデー版「日本人の宗教心の調査」によると、仏教が33%、神道4.2%、キリスト教1.2%、その他の宗教の信者は5.6%で残りの52.6%は無宗教者であるという。

両者のデータには大きな差があるが、宗教を広義にとらえるか狭義にとられるかによりこのような違いが生じたものと考えられる。

演者は、日本において薬学が、神道、仏教、キリスト教とどのように関係をもってきたか、薬史学の

立場から調査してきた。主な項目はつぎの通りである。

神道：大国主命・白兔とがまの穂、赤貝、少彦名命（薬祖神）、大同類聚方、伊勢神宮と萬金丹

仏教：法隆寺の薬、四天王寺と施薬院、薬師如来像と薬壺、西大寺の豊心丹、栄西と茶

キリスト教：ダミアン（薬剤師）とコスマス（医師）、修道院の薬局・薬草園、薬剤師としてのキリスト像、石館守三

最後に宗教の機能と薬学研究者・薬剤師にとって必要な宗教について考察する。

六史学会報告

「石館守三博士の生涯から教えられるもの：3つのお仕事に焦点を絞って」

日本薬史学会常任理事 森本和滋

六史学会例会は、今年は12月の第3土曜日に変更となり、既に講演者としてお願いしておりました京大薬学部の伊藤美千穂先生のご都合が当日はどうしてもつかなくなりました。急遽、11月下旬ジュリア・ヨング企画委員長から、当方への講演依頼メールが届きました。

4月の総会公開講演内容を半分に短縮し、up-dateし、六史学会の例会にふさわしい医療分野の連携から生まれた3つのお仕事に焦点を絞り、その証言を紐解いて話しました。

1. 国立衛試 (NIHS) に蒔かれた癌研究の種

16代の所長として、「薬品病理部を新設する計画を立て、1969年実施できた。それも私の意中に小田嶋成和君があったからであった。私の書斎で、小田嶋君としばしば、夜のふけるのを忘れて、奥さんに謝りながら議論したことは忘れ得ない思い出である。」

国立医薬品食品衛生研究所の川西徹所長もご聴講くださり、暖かい感想メールを頂きました。

2. 中央薬事審議会会長：キノホルム、スモン

「1970年6月初旬に、井形助手が偶々三楽病院で警鐘講演をしたところ、講演を傾聴した注意深い看護師が患者2例で緑尿がありと報告した。6月末スモン研究調査協議会が開かれ、どの演題もウイルス説に帰結しており、最後にオブザーバーであった田村と吉岡が緑色色素の本態を発表し、緑色反応を実演した。「オー」と会場がどよめいた。7月に石館



発表時の会場風景（儀我評議員撮影）

博士が、古巣の研究室に現れた。田村教授は直立不動で迎えた。吉岡はマッカーサー元帥風の堂々たる大先輩に緊張しながら、研究成果を数分で伝えた。直ちに、石館博士は、数十年にわたる世界的な整腸剤キノホルムの「日本ででの販売を禁止する」とつぶやいた。』。なお、紹介した井形昭弘先生は、神経内科医として、鹿児島大学医学部教授から学長、日本尊厳死協会理事長を務められましたが、今年8月12日88歳で逝去されたことを報告し、ご冥福を祈念しました。

3. 石館薬剤師会長と武見医師会長との歴史的会談：その後の医薬分業の進展

「1973年5月21日、石館会長と武見会長との歴史的会談が行われた。周りの人々の証言によると「石館さんが何回も武見さんに話をし、分業を説いたらしい。そういうことを一生懸命したので、武見さんが少しずつ変わったらしいのだよね。石館さんに対する態度が。石館さんが時には下に出て、一生懸命。「それもね」というような調子でもって訥々と話をしていたらしいのです。」

「医薬分業の原型は、互いに自主的に責任を分担しつつ、質の向上を図り、相互にチェックし合って、人間が人間である故に、免れ得ない偶発的過誤や、意識的欲望の過剰を防止、抑制するための英知にほ

かならないのではないか。ましてや、人命に関する医療においては、更に慎重なチェックを必要とする理由は、多言を要しないところではあるまいか。」との石館先生の言葉は、3つの薬系大学の講義でも多くの若者に感銘を与えた。

講演後の二人の聴講者のコメントと懇親会での感想

1952年当時東大医学部学生だった青柿舎の岡田靖雄先生から、石館教授の制癌剤合成の講義等の思い出を語ってくさり、懇親会でも引き続きお話を伺うことが出来ました。更に、加藤茂孝先生より、スモンのウイルス説がその後否定されていった話をフォロー頂き、先生の決断の凄さを称えられました。講演後、近刊の「人類と感染症の歴史—未知なる恐怖を超えて」(丸善)を著者価格でお分け頂きました。懇親会では、看護歴史学会を代表して、平尾眞智子先生が、「スモンの緑尿を観察していた注意深い看護師に感動しました。薬学史事典も購入し、看護大学でも講義に使いたいと思います」とマイクで話されました。評議員の儀我久美子先生からは「本日は、石館先生に関し、さらに多くを学ばせていただき有難う御座いました。ご講演の際のお写真をお送ります。」との暖かいメールを頂き、この写真を添付させて頂きました。

日本薬史学会2017年会のお知らせ

演題の締め切り：2017年8月5日（土）

演題要旨の締め切り：2017年8月19日（土）

事前参加申し込み締め切り：2017年10月7日（土）

大会実行委員長（事務局長）：日本薬科大学教授新井一郎

TEL：048-721-6457

FAX：048-721-6529

E-mail：yakushi2017@nichiyaku.ac.jp

薬史往来

「日本薬局方」雑感

日本薬史学会・名誉会員 山田光男

このたび、「薬史往来」に寄稿する機会を与えられたので、昭和61年6月25日に発売された日本で初めての薬に関する記念切手「日本薬局方公布100周年切手」に因んで、明治19年6月25日に公布された日本薬局方の当時の経緯を述べて、責を果たしたい。

明治政府の発足当時、海外からの輸入洋薬は、イギリス局方、ドイツ局方、オランダ局方などの基準により、純粹、真贋の鑑別が困難のため現場が混乱した。政府は明治8年に大阪、京都、東京に司薬場（薬品試験所）を設置して、オランダ人A.J.C.Geerts、J.F.Eijkmanなどから、医薬品の試験、指導に当たさせたが、拠るべき基礎の指導書がないため、輸入洋薬の真贋判定は混乱した。

当時、新設の陸海軍も医薬品の基準がないために方剤統一の必要を認めて、明治4年に陸軍軍医寮が「軍医寮局方」を作成し、これがわが国の公定局方の初めとなった。翌5年に海軍が「海軍軍医寮局方」を発行し、その表題を「官版

薬局方」とした。これが「薬局方」の名称を用いた日本で初めての出版物である。これら陸海軍からの「薬局方」は、製剤のみを収載した小冊子に過ぎなかったが、わが国の公定薬局方の公布を促したことは明らかである。

明治8年、政府は「医制」の中に「薬局方」の制定を掲げ、司薬場教師 Geerts に薬局方の作成を命じ、明治19年6月に日本薬局方が公布された。これは東洋における最初の国定薬局方で、世界の国定薬局方の発行順位で第21位の「日本薬局方」であった。



編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定および理事・評議会の承認により経費削減のため、第75号の「薬史レター」からEメール配信に原則切替えました。日本薬史学会ホームページ上に新刊薬史レターが開けるアドレスを記載しておきますのでクリックするとご覧になれます。また、発行回数は年4回を2回とし、1号のページ数は原則8ページ以内で発行しています。これで経費は大幅な削減が見込まれます。ご意見をお聞かせ下さい。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第77号 2017年3月

編集人：西川 隆 発行人：折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>